

取り除くことで救出を図るが、肝心の重機はまだ到着していない。十勝では確保できず、札幌に手配した。到着は早くても3日夕方だという。全壊した豚舎の横で渡邊組合長が手をたたくと、まだ反応がある。「少しでも多くの豚を助けたいが…」と歯がゆい表情を浮かべた。

村西札内の山田畜産でも、豚舎1棟の屋根が一部つぶれた。

同社によると、被害のあった豚舎では約1700頭の豚を飼育。このうち約1500頭の安全は確保したが、少なくとも100頭が倒壊の犠牲となったとしている。

北海道にも梅雨到来？ 農作物の影響拡大 長引く天候不順

2018年7月7日

十勝地方は6月中旬以降、曇りや雨の日が多く、梅雨を思わせる気候が続いている。「蝦夷梅雨」との言葉も日常会話で飛び交うが、気象庁は「北海道に梅雨はなく、蝦夷梅雨という用語はない」としている。天候不順の影響は、基幹産業の農業に出始めている。

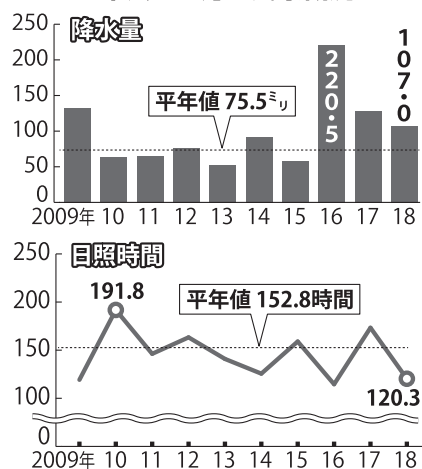
6月の十勝の降水量は管内全観測地点で平年より多く、日照時間はほとんどの地点で平年より少なかった。帯広の日照時間は120.3時間と平年(152.8時間)より少なく、降水量は107ミリと平年(75.5ミリ)より多かった。

2016年6月は低気圧や気圧の谷の影響を受け、今年より降水量が多かった。帯広は平年の約3倍、220.5ミリに達し、日照時間は114.6時間だった。ここ3年ほど降水量は平年を大きく上回るため、梅雨の連想が強まっている。

◆「蝦夷梅雨」使わず

そもそも梅雨とは、「晩春から夏にかけて雨や曇りの日が多く現れる現象」と気象庁は定義。南から北上する太平洋高気圧と、北にあるオホーツク海高気圧に挟まれ、日本付近に停滞する梅雨前線によってもたらされる。前線には南から暖かく湿った空気が、北から冷たく湿った空気が流れ込み、上昇気流により大量の雨雲が発生する。

◆帯広の6月の気象概況



停滞前線はゆっくりと日本列島を北上するため、7月後半に北海道にかかる可能性がある。だが、その頃には気温が上がり、前線をつくり出す南北の空気の温度や湿度の差は小さくなる。このため、前線は北海道に届かず、届いても勢いがなく梅雨と呼べるほど曇りや雨の日が多くなることはない。これが、北海道で梅雨がないとされる理由だ。

北海道でも6月に曇りや雨の日が増える年もあるが、これはオホーツク海高気圧の影響が大きい。道東やオホ



「梅雨」や「蝦夷梅雨」との言葉が飛び交う今年の十勝地方。用語の問題はともかく、農業現場への影響が懸念される

ーツク地方を中心に、冷たく湿った気流が流れ込んで低い雲を生み出し、霧雨が多くなる傾向にある。この現象を蝦夷梅雨と表現することが多いが、梅雨のように毎年決まった時期に発生しないことから、気象庁は蝦夷梅雨という用語を使っていない。

帯広測候所の吉田正博予報官は「6、7月の十勝の降水量は、北海道付近を通過する低気圧など、さまざまな気象要件が影響を与える。停滞前線がかかって起きる梅雨とはメカニズムが異なる」と説明する。

ただ、今年は例年と様子が違った。6月末から7月初めにかけて、太平洋高気圧の北への張り出しが強くなり、梅雨前線由来の停滞前線を押し上げた。このため、北海道に停滞前線がかかり、上川や空知地方などで記録的な大雨が降り、十勝でも北部を中心に大雨となった。この期間の十勝は南からの暖かく湿った空気に覆われて湿度も高くなり、梅雨を思わせる気候となった。

◆病虫害対策も困難

長引く天候不順の影響が最も大きいのが農業だ。管内では6月上旬までの生育は天候に恵まれて順調だったが、ここに来て遅れが見え始めている。畑がぬかるんで機械が入れず、病虫害防除や雑草の除去ができていないのも不安要素だ。